

道 民 雜 誌

10

2012

新 華 報



旭川医科大学医学部
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座
原 淵 保明 教授

(はらぶち やすあき)
1956年生まれの55歳。旭川医科大学医学部卒。82年札幌医科大学耳鼻咽喉科、91年12月ニューヨーク州立大学バッファロー校小児科学講座Research Instructor。93年7月札幌医科大学耳鼻咽喉科学講座講師。98年11月より現職。日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事、日本鼻科学会理事、日本口腔・咽頭科学会理事など。



札幌医科大学医学部
耳鼻咽喉科学講座
氷 見 徹夫 教授

(ひみ てつお)
1953年生まれの59歳。札幌医科大学医学部卒。86年米国ベイラー医科大学留学。96年札幌医科大学耳鼻咽喉科学講座助教授。99年7月より現職。日本小児耳鼻咽喉科学会理事長、日本鼻科学会理事。

鼻粘膜の上皮細胞から規定されるものがわかりつつある。またアレルギー性鼻炎では上皮系細胞から産生されるサイトカインが誘導された樹状細胞に変化を起し、粘膜自身が病気の「スイッチ」を入れることがわかった。

さらに同大学は、上気道ウイルス感染とアレルギー性炎症の関連性を研究。鼻粘膜上皮でインターフェロン産生が低下することでウイルス感染の制御が困難となり、上皮形態が変化しアレルギー性炎症が増悪することを明らかにした。

これらの研究が全国トップレベルであることが認められ、日本耳鼻咽喉科学会からの指名で「上気道炎症における鼻粘膜の役割」というタイトルで研究成果を詳細にまとめ、5月の新潟での学会で報告した。

「新しい研究テーマとして、

鼻粘膜におけるウイルス感染のメカニズムを詳細に検討し、それがアレルギーにどう結びついていくかということに取り組んでいきたい」と氷見徹夫教授は語る。

白崎英明准教授を中心とした鼻づまりを引き起こす脂質メディエーター受容体の研究も継続している。

また小児科との共同研究で、子どもの重要な呼吸器ウイルスであり喘息の悪化を引き起こすRSウイルスの感染の防止を目的とした研究を開始している。このほか、難治性の好酸球性疾患(副鼻腔炎)の疫学研究を今年度も継続している。

旭川医大耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座では、道内に多いシラカンバ花粉症に対するペプチドワクチン療法の研究を継続して行っており、国内外から高い評価を受けている。

ペプチドワクチン療法とは花粉の構成する蛋白のうちリンパ球と反応する部分(ペプチド)だけをワクチンにして投与する治療法で、「アレルギーの根本治療として期待され、アナフィラキシー反応のような副作用を完全に抑えることができ」と原淵保明教授は語る。

ただし、ペプチドは患者が持っているHLA型(白血球の型)に拘束されているので、臨床応用させるには、多数のHLA型と適合するペプチドを利用する必要がある。同大学では、数多くのHLAに適合し、しかもアレルギー反応を抑える制御性T細胞を活性化させるペプチドを発見。最近ではヒトのHLA遺伝子を持ったNODマウスによる実験が進んでおり、アレルギーワクチンの効能などについて研究を進めており、臨床へ応用する見通しだ。

また、シラカンバ花粉症

患者の多くが合併症として悩んでいる口腔アレルギー症候群について研究している。口腔アレルギー症候群とはリンゴやメロンなどのフルーツ類を食べるとアレルギー反応が起きて、舌や口唇が腫れたり、ひどくなると気道閉塞による窒息(アナフィラキシー・ショック)をきたす病気で、近年では若年層に多くみられる。「シラカンバ花粉症が原因だと気づかない患者もいるので、注意が必要」と原淵教授は語る。同大学ではこれを抑制するワクチンを開発中だ。

また今年10月4日から3日間名古屋市中で開催される「第22回日本耳科学会総会・学術講演会」では、原淵教授が司会をつとめ、難治性の中耳炎として注目を集めているANC A関連血管炎性中耳炎についてのシンポジウムを行う予定だ。